

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02815

研究課題名（和文）美術教育における「アートの身体」論を実装するパフォーマンスの実践／理論研究

研究課題名（英文）Practical/theoretical research of performance implementing "artistic body" theory in art education

研究代表者

郡司 明子 (Gunji, Akiko)

群馬大学・共同教育学部・教授

研究者番号：00610651

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「アートの身体」論を実装するパフォーマンスについて、その理論と実践の往還により美術教育としてのパフォーマンスについて考察することである。本研究の独創性は、パフォーマンス心理学（ロイス・ホルツマン）と擬人的認識論（佐伯胖）を参照し、なにものかに「なって／みる」：「なりつつある」と同時にその状況を「みる」という独自の概念を美術教育の真髄として捉えたことである。然らば、美術教育とは今ある自分ではないなにものかをパフォーマンスすることで自分という存在になっていくことを支える学習活動といえる。従来の造形活動を超えてパフォーマンス（なって／みる）を重視する提案に至ることが本研究の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

パフォーマンス（なって／みる）の学習が従来の美術教育の意義（描く・つくる・みることの真髄にパフォーマンスが位置づく）を拡張するものであるという研究成果は、世界的にも関心を集める（OECDにおける芸術教育による成果や影響、等）アートの思考／身体の活性化に向けた実践及び理論研究の素地となる。それは、美術教育が生成変化を促し子どもの「生」の学として寄与するという存在意義（社会的意義）を示すことにもなる。また、本研究成果は、日本における芸術（アート）教育の方向性を考える際に、美術科教育の軸を検討するうえで重要な視点となる。

研究成果の概要（英文）：This research is about performance that implements the 'artistic body' theory, and considers performance as art education through a back-and-forth between theory and practice. The originality of this research is that it refers to performance psychology (Lois Holtzmann) and anthropomorphic epistemology (Yutaka Saeki), and sees the unique concept of 'becoming/seeing' something: 'becoming' and 'seeing' the situation at the same time, as the essence of art education. Art education, then, is a learning activity that supports the becoming of oneself through the performance of something that is not oneself. The outcome of this research is a proposal that goes beyond conventional plastic arts activities and emphasises performance (becoming/seeing).

研究分野：美術教育

キーワード：アートの身体 パフォーマンス・アプローチ 擬人的認識論 なって／みる

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 本研究の動機と背景

2020年に開始した本研究は、前科研「美術教育におけるアートの身体論の構築」を基礎とし、「アートの身体」論を実装するパフォーマンスの実践／理論を検討するものである。アートの身体論とは進行する子どもたちの「生の全体性」喪失に対峙し、「世界(ものごと)に対話的であり続けようとする志向／行為」の活性化を目指す学び論である。奇しくも研究開始当初は、社会や環境の著しい変化に加え、コロナ禍という先行き不透明な不安を抱えるなかで、自他の存在＝「生」に向き合う拠り所としての身体が一層際立つ時期であった。一方、他者との距離をとり、人や物に触れる、触れ合うことを避けざるを得ない生活において、身体性や協同性を重視する「アートの身体」論のあり方も、考え方の変化や柔軟性を余儀なくされ、結果としてその概念や内容及び方法の拡張につながる検討を重ねてきた。

#### (2) 学校教育をめぐる背景

学習指導要領(2016年改定)の全面実施と共に、2019年に開始されたGIGAスクール構想(全国の児童・生徒1人に1台のPCと高速ネットワークを整備する取り組み)は、コロナ禍が拍車をかけ、学校と家庭がオンラインでつながる状況や使用方法の拡大に一方ならぬ影響があった。本研究は、同時代の創造性を象徴するICTの活用やプログラミング学習に身体性を伴い、感性と理性を融合する「アートの身体」論の実装的な構築を目指すものである。ゆえに、学校現場でのICT活用という切実な課題に直面し、美術教育としてはいまだ未開拓に近いメディア・テクノロジーに関する研究に向けた調査・検討に際し、より必然性が高まる状況にあった。

#### (3) 社会的・学術的な背景

2020年の世界幸福度調査(WHO)において日本は62位(G7の中では最下位)、子供・若者白書(内閣府, 2019)における日本の若者の自己肯定感の低さも引き続き課題となっている。また、研究開始当初の小中学校に通う不登校児童生徒は約20万人、その後、2022年度は約30万人に増加している。コロナ禍における生活環境の変化で、生活リズムが乱れたことが影響した可能性もあるだろうが、根本的に学校システムの限界(みんなで同じことを、同じペースで、同じようなやり方: 苦野一徳, 2019)を迎えていることは確かだろう。要するに、今の教育／生活システムは、子どもたちの“生きる喜び”を奪い、生き生きと生きることを遠ざけてしまう課題が浮き彫りになっているのではないか。このような状況に対して、「生」の回復につながるアートの教育、とりわけパフォーマンス・アプローチ(観客・共同・即興・創造・発達・遊びによる学びの要素)に基づく実践研究は必須であると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、美術教育における「アートの身体」論を実装するパフォーマンスの実践／理論の検討である。研究課題の核心的な問いとして、次の2点を挙げた。

①感性と理性を融合する「アートの身体」論の実装的な構築とは?

②「アートの身体」を育むパフォーマンス及びプログラミングの実践／理論とは?

これらの問いに対して、教科・専門性をクロスし学びの全体性を回復する広義の「パフォーマンスによる学習」の有効性を実証し、新しいアート教育の構築を目指すことが本研究の目的である。パフォーマンス心理学の「共生と発達のアート思考」と擬人的認識論(なってみる: イメージ化)を基本理念に、行為と思考の交換／共創である「パフォーマンス」の学びににおいて、アートの思考とプログラミング学習における論理的思考が身体において融合されることを実践レベルで考え、題材・教材開発を行う。特に、プログラミング学習は従来のアート教育の利点／欠点である曖昧さに対し、多様な筋道をつけることで多様な「解」に至る明瞭性がある。答え(到達点)に向かう多様なアプローチやプロセスにこそ学びがあるということを学習者に気づかせ、実際にやってみること・考えることの身体化が促進される点にも注目し研究を進めるに至った。

### 3. 研究の方法

#### (1) 文献調査等による理論研究

- ①本研究の理論的な核となる「パフォーマンス心理学」(ロイス・ホルツマンら)及び「擬人的認識論」(佐伯胖)の文献調査を通して、パフォーマンス学習のメカニズムを明らかにする。また、美術の文脈におけるパフォーマンスの発生、歴史的経緯と今日的意義を探る。
- ②美術教育の現代的課題を把握、検討するために、文献、論文調査、学会、研修機会等への参加を通して情報収集に努める。

#### (2) 実践をもとにした省察的研究

- ①身体性×プログラミング思考の観点から専門家へのインタビュー調査等を経て題材・教材開発を行い、実践に基づく省察を通じてその意義を検証する。
- ②地域・文化・学びのコミュニティモデルとなるイタリア、レッジョ・エミリア市における「レッジョ・ナラ」(市民によるパフォーマンスの祭典)を参照し「アルテナラ前橋」の実施と省察を通して、美術(科)教育への応用を検討する。

③パフォーマンス心理学及び擬人的認識論による「なってみる」実践を通じて、その省察から学びの内実を分析・検討する。

上記を通じ実践と理論の往還による考察をすすめ、「アートの身体」論を実装するパフォーマンス学習の意義を明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### (1) 理論研究

###### ①パフォーマンス心理学と擬人的認識論の融合

パフォーマンス心理学（ロイス・ホルツマン）では、「私たちは今の自分で在る（being／存在）と同時に今の自分を越えた振る舞いになる（becoming／生成）存在」として捉え、この変化しつつある独特のあり方を明らかにするのがパフォーマンスの視点であるという。（茂呂，2019）一方、擬人的認識論（佐伯胖）は、このパフォーマンスのメカニズムともいえる、対象に「なってみる」ことの意味について解明する認識論（佐伯，1978）であると捉えた。自分の分身（コピト）をあらゆるなかに潜入させ、そこでの活動や体験の結果を改めて統合させたときに人は世界を「納得する」という考え方（佐伯，2013）は、美術教育（造形活動）において目と手と感性／思考を働かせて対象と「対話」する制作（鑑賞）過程の出来事に合致する。すなわち、「なってみる」（対象に入り込み、その声を聴き、対象に“なって”声をあげる＝聴き入り応じる）ことは、なにもものかに「なりつつある」と同時にその状況や世界、あるいは自身を「みる」ということであり、「なつて／みる」ことをパフォーマンスと捉えるならば、従来の造形活動（描く、つくる、みる）のなかにパフォーマンスの真髓が宿っているのではないか。しからば、美術教育とは、今ある自分ではないなにもものかをパフォーマンスすることで、自分という存在になっていくことを支える学習活動といえる。そこで、従来の造形活動はもとより、実際に身体的なパフォーマンス（なつて／みる）を重視する提案に至ることが、本研究における文献調査等の成果である。

なお、2022年度には、パフォーマンス心理学についての新たな著書 UNSCIENTIFIC PSYCHOLOGY A Culture-Performatory Approach to Understanding Human Life『パフォーマンス・アプローチ心理学 自然科学から心のアートへ』（2022）について、著者のロイス・ホルツマンと訳者らによる連続のオンライン講義に参加することができた。日本語と英語による対話を通じて、直接、ホルツマンとのやりとりが叶うなかで、本書が重視する「アート」の捉えやパフォーマンスの可能性について思考を深めることができた。

###### ②美術教育における現代的課題の把握

日本の美術教育における今日的な課題を、本研究テーマとの関連で3つ挙げる。

一つ、美術教育の特性は学習指導要領が謳うとおり「造形的な見方・考え方」を養うことに特化しており、それは重要な学びの視点ではあるが、ややもすると視覚優位な学習として位置づいてきた感がある。美術教育は、視覚のみならず触覚、聴覚、嗅覚、味覚の活性化（イメージ化も含む）にも寄与し、多感的にものごとを捉えることのレッスンでもある。身体感覚を働かせて体全体で実感することの重要性にも目を向ける必要がある。

二つ、教育現場では、未だに特定の描かせ方、作らせ方（授業のマニュアル化、キット教材での対応等、いわゆる作品主義）が横行しており、真に子どもが創造性を発揮する学びの時間になっているのか疑問に思う場面も多々ある。このような点からも、アートの身体（＝状況に入り込む、想像／創造的な身体）の活性化に向けた学習を保障していきたい。

三つ、美術教育は素材との関係性を重視し原初的な体験を重んじる教科ゆえに、社会の動向に目を背け、ICTの活用やAIとの適切な距離感が測れないまま、時代とともにある新たな道具の活用に至らない傾向がある。一方、子どもは生活においてメディア・テクノロジーに触れ、遊び、活用している。このような状況と美術教育が引き受けるべき時代に即した学びが解離していることも大きな課題である。

これらの課題を踏まえ、特にアートの身体性の活性化を目指す授業づくりとして、2019年に受講したイタリアのアーティストユニット Segni mossi（身体×メディア）によるワークを参照し「多感覚をわたり歩くなかで思考する授業を」という提案を行った。（『教育美術』2023年5月号）。ここでは「行為の中の省察」（ドナルド・A・ショーン）をもとに、動きの中にある美術教育（造形表現活動）の特性について言及した。

##### (2) 実践研究

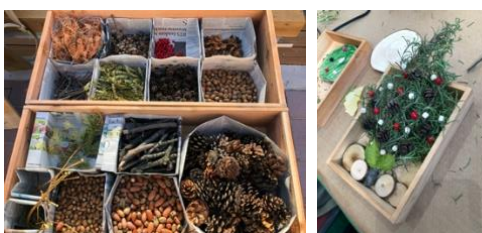
###### ①身体性×プログラミング思考の実践研究

大学授業「美術科指導法C」（井上・茂木・郡司担当）の実践を通じて、美術教育にプログラミングを導入することで実現するアナログ（身体）とデジタルを融合した社会構成主義的な学びのあり方を検討した。プログラミング学習ツールとしては、身体性との関連づけを意識しながら、Viscuit（ビスケット）、Sphero（スフィロ）、MESH（メッシュ）、Scratch（スクラッチ）を紹介した。その上で、身体性・即興性・協同性に基づきプログラミングを取り入れた総合的表現として取り組む「プログラミング学習ツールを取り入れた演劇表現を考えよう」という課題を提示。そこで起こった学びを明らかにするため、動画による活動過程及び作品の記録、また、学生の振り返りの記述から読み解き分析・考察を行った。（第44回美術科教育学会東京大会にて口頭発表・2021年）

## ②コミュニティ×パフォーマンスの可能性

本研究の中核となるパフォーマンス・アプローチの具現化を図る「アルテナラ前橋 2023 一つむぐー」(=0 歳から 100 歳まで楽しめる読み語り／パフォーマンスの祭典)を実施した。12 月より講座生を募集し、市民が表現の当事者になるべく 7 回にわたる講座(ダンサーや舞台演出家の講師招聘)を通じ、3 月初旬に発表会当日を迎えた。当日は、地域及び都内からアーティストを招き、前橋文学館及びアーツ前橋を中心に前橋の街なかを舞台にパフォーマンス、造形ワークショップ、哲学対話など、多様な文化事業を展開し、総勢 200 名ほどの参加者を得て充実の会を催すことができた。講座生の達成感や充実感も窺え、今回の学習モデルをアレンジして学校教育に展開していくなど、今後の可能性につながる機会を得た。(2023 年)

また、前橋馬場川通りの再開発に伴うアートワークショップでは、街なかを散策しながら材料を集めて季節の小箱をつくるなど、身体性(動き)の観点からイベントを企画・実施することを通じ、地域活性化(場所)と「アートの身体」の親和性についても考察する機会となった。(2023 年)



街なかを歩いてつくるアートワークショップ

## ③パフォーマンス学習「なってみる」実践

・学習指導要領図画工作編の目標に「なってみる」: パフォーマンスで理解する実践

大学授業「図画工作科指導法」では、パフォーマンス・アプローチに基づき、学習指導要領の目標の文言に「なってみる」(協同でパフォーマンスすることを通じて理解する)実践を行っている。学生の学びの過程や振り返りの記述から、対象に「なってみる」ことにより、自身の身体を投じたイメージ化が、ものごとに親しみを感じたり、自分ごととして捉えたりするなど、効果的な学習であることが明らかになった。一方、パフォーマンス特有の他者の存在を意識し、笑いやウケねらいに傾く傾向もあり、内容の深い理解に至るには課題も見出された。(第 43 回美術家教育学会愛媛大会にて口頭発表・2020 年)

・中之条芸術大学におけるオンラインワークショップ「なかんじよになってみる?!」

本研究の中心理論であるパフォーマンス・アプローチにおける「なってみる」学びを美術教育の視座から独自の解釈を試みた。「なってみる:trying」を「なる:becoming」と「みる:viewing」ことから生成される行為として捉え、「なつて／みる」と表記することにした。「なかんじよ(中之条)になつてみる?」実践(学部 4 年岩田龍真卒業研究)と保育現場におけるドキュメンテーション(学びの記録)から幼児があらゆる人やものや状況に「なつて／みる」様子を読み解き、分析・考察を行った。(第 44 回美術科教育学会東京大会にて口頭発表、及び日本保育学会第 75 回大会自主シンポジウム・2021 年)

・多感覚の活性化につながる教材研究及び展示

文化庁委託事業「令和 5 年度障害者等による文化芸術活動推進事業:インクルーシブアートコーディネーター養成講座開設に向けたプロジェクト」の企画・運営に携わったことも関連し、その状況に「なつて／みる」観点から、多感覚の活性化につながる教材研究を進めることができた。以下の研修機会、作品制作・展示、シンポジウムなどを通じて、多感性、包摂性の視点から「アートの身体」について考察する機会となった。いずれも 2023 年度における成果である。①長野県立美術館における“ひらくツール”開発に関する研修会(5 月)②ダイアログ・イン・ザ・ダーク研修会(7 月)③「みんなとつながる上毛かるた」づくりへの参加(8 月)④中之条ビエンナーレでの展示:感覚の時間「くつぬぐ?」+シンポジウム(9 月)⑤多感覚遊びの空間展示(11 月)これらは、いずれも身体感覚をひらき、他者の視点に「なつて／みて」、多様なもの・こと世界との対話を育む時空間のあり方を検討する実践研究となった。(2023 年)



アルテナラ 2023 チラシ



アルテナラ 2023 の様子



中之条ビエンナーレ 2023 での展示  
感覚の時間「くつぬぐ?」

## (3) 今後の課題

今後は、「アートの身体」論を実装するパフォーマンスの概念を、より美術科教育の授業レベルで実践検証していくことが必要である。従来の造形活動「描く・つくる・みる」ことのなかに位置づく「なつて／みる」(イメージ化の)視点と身体による実際のパフォーマンスの様相を丁寧分析し論文執筆につなげたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 郡司明子	4. 巻 Vol.40
2. 論文標題 コロナ禍の色彩－食事の色から生活をみる－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 色彩教育	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 茂木一司・竹丸草子・梶原千恵・大内進・高橋杏	4. 巻 56
2. 論文標題 視覚障害のためのインクルーシブアート教材開発：アルチンボルドの絵画を「みたて」る鑑賞 / 表現題材	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本美術教育研究論集	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 茂木一司	4. 巻 21
2. 論文標題 インクルーシブ色彩学習試論 - 色彩配色から学ぶ自己と世界の調和と対話	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学人文学フォーラム	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 茂木一司	4. 巻 4
2. 論文標題 アクティブ・ラーニングとしてのオンラインワークショップのつくりかた - 『教育の方法及び技術』の授業研究 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 令和4年度跡見学園女子大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 150-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上昌樹	4. 巻 40
2. 論文標題 幼児の表現過程を捉える保育学生の学びに関する一考察 造形遊びの模擬保育実践を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 育英短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 郡司明子	4. 巻 Vol.39
2. 論文標題 大学でのオンライン授業による色彩教育の実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 色彩教育	6. 最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤井麻里・高松智行・郡司明子	4. 巻 なし
2. 論文標題 答えのない世界を生き抜くための思考を培うAIS	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和3年度アーティスト・イン・スクール活動報告	6. 最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 茂木一司、竹丸草子、大内進	4. 巻 vol.20
2. 論文標題 視覚障害のためのインクルーシブアート教材開発の可能性:「絵本をつくろう」ワークショップの学習環境デザインがつくる関係性の学びの意味	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学フォーラム	6. 最初と最後の頁 171-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 茂木一司	4. 巻 第57号
2. 論文標題 絵画学習のワークショップ化に関する事例研究: 絵が描けない人のためのインクルーシブ教育の方法論から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 139-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Kasahara, Satoshi Ikeda, Kayoko Komatsu, Toshio Ishii, Takashi Takao, Kazuji Mogi, Minoru Inoue, & Kaho Kakizaki	4. 巻 なし
2. 論文標題 Invitation to Walking Inquiry Along the Kumano Kodo Pilgrimage Trails: An A/r/tographic Travelogue Re/braided with Walkers' Inquiries. In Lasczik, A., Irwin R. L., Cutter-Mackenzie-Knowles, A., Rousell, D., & Lee, N. (Eds.). (2022). Walking with A/r/tography. Cham: Palgrave Macmillan.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Lasczik, A., Irwin R. L., Cutter-Mackenzie-Knowles, A., Rousell, D., & Lee, N. (Eds.)	6. 最初と最後の頁 59-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kazuji Mogi	4. 巻 なし
2. 論文標題 Walking Art to Kumano Kodo = Search for Proactive and Free Learning by the Adaptation of Individuals (Inner Journey) and Society (Experiment of Community) by Art Mediating the Spiritual World	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Mapping A/r/tography: Exhibition Catalogue, InSEA 2019 World Congress. /InSEA Publications	6. 最初と最後の頁 106-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 茂木一司	4. 巻 なし
2. 論文標題 「現代社会」における美術教育の位置付けとABR(ABR, ABER, a/r/t含む)の可能性: 理論/実践のあわいを考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アートベース・リサーチがひらく教育の実践と理論(ABRから始まる探究(1)) 高等教育編学術研究出版	6. 最初と最後の頁 140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新井祥文・井上昌樹・大屋陽祐・金子仁・小屋美香・坂口淳子・佐藤喜久一郎・柳晋,	4. 巻 第20号
2. 論文標題 保育・幼児教育におけるSDGsへの取り組みについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 育英短期大学幼児教育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 郡司明子・茂木一司・市川寛也・栗原啓祥・藤田善宏	4. 巻 第38号
2. 論文標題 「コロナ禍における表現とコミュニケーションの学びに関する一考察『コミュニティ学習ワークショップ』の授業を通じて」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群馬大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 pp.127-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 郡司明子	4. 巻 Vol. 39
2. 論文標題 「大学でのオンライン授業による色彩教育の実践」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 色彩教育	6. 最初と最後の頁 30 - 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 郡司明子・茂木克浩・井上昌樹	4. 巻 第2巻
2. 論文標題 「アーティスト・イン・スクール(AIS)アドバイザー兼 コーディネーター 3 人によるふりかえりトーク」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 令和2年度 アーティスト・イン・スクール活動報告書	6. 最初と最後の頁 7 - 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 茂木一司	4. 巻 第38号
2. 論文標題 インクルーシブアート教育の理念と当時者性 - 視覚障害を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群馬大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 105 - 112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 茂木一司、多胡宏、竹丸草子	4. 巻 第56号
2. 論文標題 インクルーシブアート題材開発の理念と実践 現代アートによる見えない/見える人が協働する題材開発過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群馬大学共同教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 茂木克浩、亀井章央、井上昌樹	4. 巻 第41巻
2. 論文標題 幼児の造形表現から中学校美術の授業までの版に表す経験の系統性とその特徴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 足利短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 73 - 81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計51件 (うち招待講演 15件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 植村朋弘、森真理、徳田憲生、郡司明子、津田純佳
2. 発表標題 子どものアートの思考から子ども観・保育観を問い直すーレッジョ・エミリアの乳幼児から保育の地平線の彼方へー
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会(自主シンポジウム)オンライン開催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mori, M. , Uemura, T., Gunji, A., Tokuda, N.
2. 発表標題 Transcending the border of fantasy and reality in play as the key for children as agency for living through uncertainty.
3. 学会等名 EECERA 30th Conference (Glasgow, Scotland), ポスターセッション (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 市民が文化芸術に関わる意味と可能性についてーartenarraを事例としてー
3. 学会等名 アルテナラ世田谷シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 幼時期における表現活動の可能性について
3. 学会等名 令和4年度第1回北区幼稚園教諭研修会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 子どもの育ちにおける造形活動の可能性
3. 学会等名 東京家政大学 第3回育ちのための表現シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 図画工作「造形遊び」ワークショップ
3. 学会等名 令和4年度高崎市幼保小連絡協議会第4ブロック研修会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 Life記録－2014－2015－
3. 学会等名 第7回お茶の水女子大学ライフ×アート展：記録展－子どもにふれる－
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子・他
2. 発表標題 アルテナラ前橋2023－つむぐ－
3. 学会等名 アルテナラ前橋
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 茂木一司
2. 発表標題 メディアアートで人は幸せになる...？パンデミック以降のインクルーシブ社会におけるアート／教育の役割
3. 学会等名 令和4年度文化庁メディア芸術祭名古屋展「あそびのダイナミクス～こころのインタラクション」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 茂木一司
2. 発表標題 図工美術教科書は本当に必要か？(共生)社会構築の中の美術 / (科)教育の意味・教科書づくりを通して自分たちにできることを考えよう
3. 学会等名 日本文教出版社美術教科書ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 茂木一司・梶原千恵・大内進・竹丸草子・高橋杏
2. 発表標題 視覚障害のためのインクルーシブアート教材開発：アルチンボルドの絵画を「みたて」る鑑賞 / 表現題材
3. 学会等名 第56回日本美術教育研究発表会2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 茂木一司・大内進・布山タルト(毅)
2. 発表標題 見えない/見えにくい/見える人がつくるインクルーシブアート教育が現代美術教育を改革する メディアアート教材開発を通して考えたこと
3. 学会等名 アートミーツケア学会2022年度大会・総会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 茂木一司・布山タルト(毅)・大内進・竹丸草子
2. 発表標題 視覚障害のためのインクルーシブアート教材の開発：タクトロープとKoma Otoの開発過程
3. 学会等名 第45回美術科教育学会兵庫大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 植村朋弘・森真理・郡司明子・徳田憲生・磯部錦司
2. 発表標題 生きるいとなみとしての子どものアートの思考を語り合うー日本とレゾ・エミリアにおけるプロジェクトアプローチに着目してー
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会(自主シンポジウム)オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井上昌樹・茂木克浩・郡司明子
2. 発表標題 幼児のアナログとデジタルを越境する「インタラクティブプレイ」の構想
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会(ポスター発表)オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 子どもの表現から展覧会へ
3. 学会等名 群馬県特別支援学校文化連盟夏期研修オンライン開催(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 コロナ禍の色彩ー食事の色からー
3. 学会等名 色彩教育研究会本部夏期研修会オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山口通喜・市川寛也・郡司明子・林耕史・齋江貴志・喜多村徹雄
2. 発表標題 中之条ってどんな町?
3. 学会等名 中之条ビエンナーレ2021町民アートプロジェクト「中之条芸術大学」オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市川寛也・郡司明子
2. 発表標題 「まなび+アート」×研究ーみんなの自由研究発表会ー
3. 学会等名 中之条ビエンナーレ2021町民アートプロジェクト「中之条芸術大学」オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山重徹夫・斎木三男・人見将・西岳拓貴・郡司明子・市川寛也・林耕史・齋江貴志・喜多村徹雄
2. 発表標題 中之条ビエンナーレの過去・現在・未来
3. 学会等名 中之条ビエンナーレ2021町民アートプロジェクト「中之条芸術大学」オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 ぞうけいあそび勉強会(保育者向け)
3. 学会等名 小学館集英社プロダクション研修会オンライン開催(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 ぞうけいあそび勉強会(主任・園長向け)
3. 学会等名 小学館集英社プロダクション研修会オンライン開催(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 美術教育における「なって/みる」ことに関する一考察ーアートの身体の活性化に向けてー
3. 学会等名 第44回美術科教育学会東京大会オンライン開催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上昌樹・郡司明子・茂木一司
2. 発表標題 図工美術科教育でプログラミング教育は可能かー身体性に目して
3. 学会等名 第44回美術科教育学会東京大会オンライン開催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 茂木一司
2. 発表標題 視覚障害のためのインクルーシブアート学習の理念と教材開発
3. 学会等名 第60回大学美術教育学会山形大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 茂木一司
2. 発表標題 視覚障害のためのインクルーシブアート教育:理念と教材開発
3. 学会等名 第44回美術科教育学会東京大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 茂木一司・石田智哉・森田かずよ
2. 発表標題 Keynote.2 多様性と美術教育:障害×アートが拓く身体の学びの可能性・基調対談Keynote:社会の変化、アートの変容、美術教育はどこへ
3. 学会等名 第44回美術科教育学会東京大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤亜紗、広瀬浩二郎、大内進、茂木一司
2. 発表標題 分けないと多様性-視覚障害のためのインクルーシブアート教育とは何か
3. 学会等名 『視覚障害のためのインクルーシブアート学習』出版記念トークイベント
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 多胡宏、栗田晃宜、山中由美子、茂木一司
2. 発表標題 子どもが主体的に学ぶ視覚障害支援美術教育の実践とはどういうものか?-インクルーシブ教育時代の視覚障害美術教育の現状とこれから
3. 学会等名 『視覚障害のためのインクルーシブアート学習』出版記念トークイベント
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 布山タルト、松本祐一、山城大督、大内進、茂木一司
2. 発表標題 支援から主体的に変えるICT×身体メディアの学習は可能か?-インクルーシブ教育時代の新しい表現と学び
3. 学会等名 『視覚障害のためのインクルーシブアート学習』出版記念トークイベント
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 広瀬浩二郎、桑田知明、齋藤名穂、茂木一司
2. 発表標題 視覚障害が社会を変えるインクルーシブデザインプロジェクト
3. 学会等名 『視覚障害のためのインクルーシブアート学習』出版記念トークイベント
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上昌樹
2. 発表標題 「社会につながる美術教育」の実践ー令和3年度群馬美術教育研究所（ぐんびけん）活動報告よりー
3. 学会等名 群馬大学美術教育長期研修院令和3年度研修報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 教員養成学部におけるオンライン授業の課題と可能性ー図工科指導法の学習を通じてー
3. 学会等名 図工美術会議 夏の学習会 オンライン（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 茂木一司・郡司明子・宮川沙織・廣瀬智央・中山晴奈
2. 発表標題 食×アートプロジェクトの過去・現在・未来
3. 学会等名 食×アートの学びが拓く持続可能な社会構築研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 ぞうけいあそび勉強会
3. 学会等名 小学館集英社プロダクション研修会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 住友文彦・郡司明子・中島佑太
2. 発表標題 「学校の変なルールを面白いものに」
3. 学会等名 第4回まちほけチャンネル（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郡司明子・竹丸草子・萩原朔美・藤田善宏・渡邊未有・ドロップス・a/r/t/s lab. ・ぐんぴけん・てんがいず
2. 発表標題 きざし
3. 学会等名 アルテナラ前橋2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郡司明子
2. 発表標題 美術教育における「アートの身体」論を実装するパフォーマンスの実践 / 理論研究に向けて
3. 学会等名 第43回美術科教育学会愛媛大会（千葉大会提出題目の発表）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮川紗織・梶原千恵・石原加奈子・郡司明子
2. 発表標題 子どものアート敵身体 / 思考を促す造形活動の考察
3. 学会等名 第43回美術科教育学会愛媛大会（千葉大会提出題目の発表）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 茂木一司・多胡宏・小野介也
2. 発表標題 麦わら屋@mina展
3. 学会等名 なし
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 茂木一司、多胡宏
2. 発表標題 視覚障害のためのインクルーシブアート学習
3. 学会等名 令和2年度全国盲学校図工・美術教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 茂木一司
2. 発表標題 日本の「構成」・「造形」教育再考、バウハウスと日本の美術教育 - 構成」・「造形」教育の系譜と現在 -
3. 学会等名 公益社団法人日本美術教育連合主催総会記念講演会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 茂木一司
2. 発表標題 「ワークショップで学ぶ色彩：『色彩ワークショップ』（2020）を使用した色彩学の基礎理論と日本の色彩文化」
3. 学会等名 日本色彩教育研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 多湖宏・茂木一司・小野介也
2. 発表標題 麦わら屋の作家たち展
3. 学会等名 於 詩季画材
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 茂木一司、北島珠美、住中浩史、竹丸草子
2. 発表標題 栗田支援学校と美大附属高等学院の映像制作を通しての交流活動におけるアドバイザー講師
3. 学会等名 なし
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西村陽平、茂木一司
2. 発表標題 多様性を育む絵画ワークショップ&ファシリテーション講座
3. 学会等名 なし
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 茂木一司
2. 発表標題 障害のある人達のアートを支える / ファシリテーションの可能性
3. 学会等名 「多様性を育むダンス&美術プロジェクト」トーク（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 茂木一司、竹丸草子、多胡宏
2. 発表標題 令和2年度障害者芸術文化活動推進研修会ワークショップ
3. 学会等名 なし
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 茂木一司、手塚千尋、北島珠美、宮坂慎司
2. 発表標題 特別支援学校におけるオンライン授業の実践報告と課題について
3. 学会等名 第43回美術科教育学会愛媛大会、インクルーシブ美術教育部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井上昌樹・茂木一司
2. 発表標題 美術教育専攻の学生がつくる幼児向けインタラクティブ遊び環境のデザイン
3. 学会等名 日本STEM教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上昌樹
2. 発表標題 コロナ禍における「社会につながる美術教育」の実践－ぐんぴけんWorkshop Movie「つくってみよう！やってみよう！動画」
3. 学会等名 群馬大学美術教育長期研修院令和2年度研修報告会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 編集委員会（代表：栗田真司） 共著者：市川寛也、内田裕子、小池研二、梶原良成、栗田真司、郡司明子、喜多村徹雄、林 耕史、齋江貴志、小口あや、片口直樹、高須賀昌志、武末裕子、博多哲也、平野千枝子、本 田悟郎、吉田奈穂子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学術研究出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 『美術教育の理論と実践 第2巻』 執筆担当「中之条ピエンナーレにおける群大美術の取り組み」	

1. 著者名 茂木一司代表編集、大内進、多胡宏、広瀬浩二郎編著、伊藤亜沙、池田吏志、笠原広一、布山タルト、手塚千尋、山城大督他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ジアース教育新社	5. 総ページ数 375
3. 書名 視覚障害のためのインクルーシブアート学習：基礎理論と教材開発	

1. 著者名 Kazuji Mogi, Soko Takemaru, Rocfo Lara-Osuna, Ken Morimoto, Kayoko Komatsu, Takashi Takao, Kwang Dae Chung, Ken Morimoto, etc.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 InSEA Publications	5. 総ページ数 70
3. 書名 “ Mapping A/r/tgraphy:Exhibition Catalogue, InSEA 2019 World Congress ”	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	茂木 一司  (Mogi Kazuji)  (30145445)	跡見学園女子大学・文学部・教授    (32401)	
研究分担者	井上 昌樹  (Inoue Masaki)  (10780471)	育英短期大学・その他部局等・講師    (42307)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------